
ばんぱいあ・へるぷっ！

唯 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばんぱいあ・へるぷっ！

【Nコード】

N5847F

【作者名】

唯一

【あらすじ】

もし、いつもあなたの隣にいる娘が人の血を吸うバンパイアだったら・・・あなたは、どうしますか？

プロローグ

少年は、いつも少女といた。

少女は、いつも少年といた。

いつもそばには、君がいた。楽しかった。

いつもそばには、君がいた。恥ずかしかった。

いつもそばには、君がいた。幸せになった。

少年にとって少女は、家族だった。

少女にとって少年は、恋人だった。

少年は、人間だった。

少女は、人間ではなかった。

それだけの、たったそれだけの違い。

プロローグ (後書き)

はじめまして、竜騎士666です。

この作品は他サイトで書いたのも入ると、5作目になります。

一見シリアス風ですが、この後はあま〜いラブコメです。

2、3日に一章というペースで行きたいと思ってます。

それでは、失礼。

第1章 転校・・・!?

「お前たちには、転校してもらおう」

いきなり父さんがそう言ったときは、なにかの冗談だと思った。

「出発は明日。・・・早く荷物をまとめておけ、恭介、詩織」

ここで、やっと冗談ではないことに気づいた。

「て、転校ってそんな急な！むちゃくちゃだよ、父さん！」

俺の名前は、明石恭介。ごく普通の高校二年生だ。

「そうですね！まだ何の準備もしてないのに！」

そこで、こいつが高宮詩織。隣同士に当たる明石家と高宮家は、以上に仲がよかった。

朝、夜の食事は一緒。遊園地に行くのも一緒。葬式に行くのも一緒。・・・という、ありえないぐらいの親交の深さだった。

中でも詩織とは、ほとんどすべての行動が一緒だった。小、中、高すべて同じ学校、同じクラス。なぜか行かされていた空手道場も一緒に通い、さらには、兄妹と間違えられることもある。幼馴染と言えばそれまでだが、ここまで一緒だと何か不思議な力を感じる。

だが、そんな俺と詩織の必死の反論も、

「前から決まっていたことなんだ。・・・諦める」

と、軽々と打ち砕かれてしまった。

父さんは、若くして教育委員会の上層部に勤めている。だから、一度言ったことを絶対に曲げない。そんな父さんのことをかつこいと思っていたが、どうやら今回はそれが裏目に出ってしまったようだ。

「仕方ないですね・・・はあ・・・」

嫌そうな顔をする詩織。だが、付き合いの長い俺にはわかる・・・こいつ、喜んでる!!!!

「まあ、いいんじゃないですか、恭介くん。平凡な高校生活にあきあきしていたところですし」

それはお前だけだろ!!!!と心の中で突っ込んでみるも、わくわくしている自分がいる。

「まあ、転校つていうのもいいかもしれないな。こうなったら、秀才系にイメチェンでもしてみるか?」

それを聞いて、フフツと鼻で笑う詩織。

「なに言ってるんですか、恭介くん。恭介くんの成績じゃ、秀才キヤラなんてとうてい無理ですよ?」

ウツ、痛いところを。

「な、何を言ってる!この俺が本気を出せば、学年トップなど簡単

に・・・」

「取れません。無理です。」

断言する詩織。

その通りです。すいません。調子に乗ってました。

「あー、そうだ、言い忘れてたけどな、」

ん？俺と詩織の視線、父さんに集中。

「お前ら、同じ部屋に住むことになってるから」

・・・八？

俺と詩織の目が、点になった。

第1章 転校・・・！？（後書き）

どうもどうも。竜騎士666です。

第1章、投稿させていただきました。

どうでしたか？

ぜひぜひ、評価・コメントも書き込んでください。

（私が踊り狂います）

それでは、第2章 同棲・・・！？ でまたお会いしましょう。
では、失礼。

第2章 会長・・・!?

俺と詩織に向けられるたくさんの好奇の目。しかし、それは決して居心地の悪いものではなかった。

「はじめまして、明石恭介です。この学校の事もよく分からないので、いろいろ教えてください」

無難な挨拶をして、俺はペコツと頭を下げた。

ここは文月学園2年A組の教室だ。父さんから転校を告げられた日から、二日が経過している。

正式にこの学校に転校してきた俺たちは、恒例の「転校生の挨拶」を行っているのだが・・・

「えっと、私は高宮詩織と言います。みんな、仲良くしてください」

満円の笑みで俺に続く詩織。

普通いくら同年代とはいえ初対面の人間に「マークを飛ばされたら誰だって軽くは引くものだが、詩織は美人なので問題ない。」

クラス内を見渡すと、詩織に熱い視線を送っているやつが最低でも1、2・・・16人か。って、これってクラスの男子全員じゃないか!?

「ん、そんなもんか、明石、高宮?」

そう言ってくるのはこのクラスの担任の中島先生だ。まだ30代なのに学年主任を任されていると言うことは、相当やり手の先生なのだろう。

「あ、先生。後もうひとつだけ良いですか？」

そうことわって、詩織が話し出した。いったい何なんだ？

「私と明石恭介くんは・・・一緒に住むことになっているんですよ」

「」「殺せつつつつ！」「」

男子連中が机の中に手を入れたかと思うとさまざまなものを取り出してきた。

・・・え？いや、まだカッターとかはさみは分かるよ？でもなに？その黒い箱のようなものは？

「スタンガンはまずいだろっつ！」「」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバいつ！！！

落ち着け！！クールになれ明石恭介！！まずは状況確認だ！！！

「詩織っ！！あんなこと言う必要なかったじゃないか！！！」

そういつて隣でニコニコしている詩織に詰め寄る。

この際なりふりかまってるられるか！！！こっちは命がかかってんだ

！！！！

「面白そうだからですよ。どうせいつかバレるんですし」

ちくしょう！！あっさり返されてしまった！！

前を見ると、凶器を持って俺に近づいてくる男子生徒達。くそ、万
事休すか……

「待ちなさい、諸君！！！」

どこからか聞こえてきた甲高い声。

「ま、前原さんだ！前原が来たぞ！！」

「なにい！？は、早く道を明ける！死にたいのか！」

男子生徒達の悲壮な声。あいつらを震え上がらせるなんて、い、い
つたいどんな人なんだ「前原」は……

「ふむ、君が明石恭介君か。私が生徒会長の前原だ！」

……あれ？声はするのに、左右を見回してみるもどこにも姿はな
い。

「こら、どこを見ている！！私はここだ、ここ！！！」

そういわれて、俺は「ここ」……つまり、自分の足元を見た。

「……え？」

そこに、一人の少女がいた。ツインテールの髪の毛をたなびかせた、すこしツリぎみの目をした女の子が、そこにいた。

べつに、それ自体はおかしいことじゃない。問題は、

「君、小学生？」

彼女があまりにも小さかったことだ。

「そうか、やはりそう見えるか……」

ハア、とため息をついた後、少女は話し始めた。

「私が生徒会長の前原だ」

「……え？」

俺が驚いているのもそっちのけで、少女は続けた。

「君と高宮詩織さんが、同居をする予定だと言うのはほんとうかね？」

「は、はい……」

突然のことにわけもわからず答えてしまう。

「君と高宮さんは、従兄妹とか、そういう親戚関係に当たるのかい？」

「い、いえ、ただの幼馴染で・・・」

ふむ・・・とうなる少女。すると突然動きを止めてひれ伏している
男子生徒達に向かって、

「不純異性交遊はいかな。よって、再開してよし」

と言って、去っていった。

「・・・え？」

まったく状況が分からない俺は、首の後ろでバチツと音がするのを
聞いて、

・・・ゆっくりと倒れていった。

第3章 約束・・・！？

目を開けると、詩織の顔があった。

「・・・なにしてんだ、お前」

そう言うと、詩織は飛び跳ねるようにして俺から離れた。

「あ、あのですね、これはその、ち、違ってますよ？起きたのかな
くと顔を見ようとしただけで・・・」

・・・だから何が違うと言うのだ。

「じじは・・・？」

さっきまでいた保健室とは違う場所みたいだ。

「あ、ここはですね、保健室なんですよ。ほら、恭介くん教室で・・・」

「・・・あ」

思い出した。詩織の問題発言の後、俺を襲おうとする男子連中から逃げていると、確か・・・

「あの小学生は？」

あの少女が男子連中に襲撃の許可を出さなかったら、俺はスタンガンで気絶するという普通は一生ない経験をすることもなかったはず

だ。少しぐらい文句を言ってもいいだろう・・・少しぐらいは。

「あの娘は、この学校の生徒会長さんだそうですよ」

・・・は？

「2年生で、私達と同じクラスだそうです」

・・・え？高校生？しかも2年？・・・あの小ささで？

「それよりほら、お礼を言ってください。あの混乱の中から、恭介くんを助けてここまで運んできたの、中島先生なんですよ？」

詩織の隣で、やあ、と少し疲れ気味に話してくる中島先生。

「君も転校早々問題を起こしてくれたね・・・まあ、慣れてるけど」

それは俺のせいではないと思うのだが。

それでも一応謝っておくと、

「ああ、これが君達の部屋の鍵ね。学生寮の場所や連絡事項は・・・高宮が知ってるからいいか。じゃあ、また明日な」

と言って飄々と去っていった。時計を見ると、もう4時過ぎだ。俺は8時間ほども眠っていたことになる。

「・・・」

手元に残った「208」とロゴの入った鍵を見ると、これから一

緒に住むという事実が頭から離れない。

俺だって健全な16歳男子だ。幼馴染とはいえ、同い年の美少女と同棲というのは決して嫌なわけじゃない。

だからってなあ・・・相手が詩織だとそんなことを考える暇もないような気がする。

「じゃあ、そろそろ行きましようか」

そういつて俺のカバンも持とうとする詩織。

俺が、

「いいよ、自分で持つから」

そういつと、横に首を振って譲らない。

「だめですよ。いくらおもちゃだといってもスタンガンを首に当てられたんですから・・・ほら、帰りましよう、恭介くん」

しかし女の子に荷物を持たせて、自分は手ぶらと言つのは居心地が悪いな。

何かないものか・・・と考えていると、机の上に置いてあるカレンダーが目についた。

「そうだ、明日詩織の誕生日じゃないか」

そう、5月3日は詩織の誕生日だった。

まずいな・・・プレゼント、何も買ってないぞ。

詩織にそのことを正直に言ってお謝ると、

「・・・しかたないですね。まあ、元から期待はしてませんでしたし」

と案外軽い返事が返ってきた。

しかし、プレゼントは毎年あげていたものだ。今年だけなしというのもな・・・

そこで、困ったときの裏ワザに頼ることにする。

「・・・じゃあ、あれだ。詩織の誕生日だけは、なんでも好きなことをしてやる・・・それじゃダメか？」

やはり、無理があるだろうか？

しかし詩織は以外にも、

「ほ、ホントですか！ぜ、絶対ですよ！約束しましたからね！」

と言って、喜んでいるようだった。よかった、よかった。

・・・まずい約束したな、と思ったのは、夜の12時をすぎた辺りだった。

第3章 約束・・・！？（後書き）

どうも、竜騎士666です。

実は僕の学校、12月11日から試験期間に入ります。

よって、少しでも更新のペースが遅れるかも知れません。ごめんなさい。

第3章 覚醒…！？（仮）にて、またお会いできることを楽しみにしています。

では、失礼。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5847f/>

ばんぱいあ・へるぷっ！

2010年10月9日00時46分発行